

夏の即売会イベントでのお買い物を終えての夕方。

電車を使ってあなたの実家の最寄り駅に降りる頃には乙女の秘密も隠せなくなっていた。

汗染みが目立たない濃い色と少し厚手のシャツにジーンズという「式」の着こなしは新鮮であり、式であれば夫の前以外でさえ恥ずかしがりそうな艶めかしさを感じてくる。

今朝は昨夜ハメを外しすぎたのもあって飛び起きての出発ということで意識していなかったが、半日以上もべったりとデートしていればさすがに気づく。

「いつから……気づいていたのかしら？」

そして周りに聞こえないように尋ねる式の言葉にあなたはドキリとしてしまった。

ピクンと驚いてズボンの下が跳ねている。

目線を向ければ胸元の微かに尖った膨らみが気になって仕方がない。

それにもしや此方もという推測は当然のように正解。

あなたは理由を知らないが、今日一日「式」は下着をつけずにあなたと歩いていた。

「まあ良いわ。それより……」

手をつないでいるあなたの手に汗があふれる。

それを感じ取った式は生唾を飲み込むと、あなたの手を当然のように引いて寄り道を促す。

只今の時刻は夕方5時半。

あなたの実家に顔を出すにしても、1時間程度なら休憩する時間がふたりにはあった。

「一休みしていきましょう」

式が誘ったのはいわゆるホテル。

子供の頃に何度も見ていたが立ち入る機会のなかった逢引宿である。

中学生くらいの頃には誰かと入ってみたいと憧れもしたこの場所に、まさか彼女と入るとはあなたも想像したこともなし。

式の方から誘っているのに「本当に良いのか？」とさえ思ってしまうのは一種の郷愁のようなものなのだろうか。

既にあなたと「式」はそんなことを気にする関係ではないはずなのに。

「丁度良かったわ。このホテルには下着が売っているのね」

ご休憩で部屋のキーを受け取り、部屋に入ったあなたと式はとりあえず室内を物色。

浴室は綺麗に清掃されているが湯は溜まってない。

ベッドはシワ一つなくシーツが伸ばされていて清潔そのもの。

そしてベッド横にあるルームサービスの小型自販機をチェックした結果が式のこの発言であった。

下着と言ってもここは恋人や夫婦がえっちなことをするための連れ込み宿。

当然普通の下着ではなく「はいたまま、着たまま行為に及ぶため、あるいは前戯として目で楽しむためのエロ下着」なのは明白である。

式が間髪入れずに購入した2着もそう。

片方は乳首とデリケートゾーンにスリットが入っており、指でずらすと敏感なところがあらわになってそのままえっちができるもの。

そしてもう片方は下着としての機能を疑うほどに布面積が少ないもの。

式は早速あなたのためにつけてみたいという表情をしているが、それを見てあなたのほうが先に我慢の限界を迎えていた。

まだ洋服を脱いでいない式に背中側から抱きついたあなたは張り裂けそうな息子を背中に押し付けながらシヤツ越しに式の胸を優しくつかむ。

掌に伝わる乳房の柔らかさ。

指先に残る隆起した乳首の程よい弾力。

そしてうなじから立ち上る「式」の淫らな汗の匂い。

最初に誘ったのは式の方でありながら、すっかり逆転状態と言えよう。

「んもー。わたしのほうから誘ったのに」

式の呆れるような声にも艶が出るのは当然かもしれない。

あなたの指先に式は悶え、ずっとノーパンのまま擦られ続けていたジーンズの内側はあなたのものを咥えてくた仕方がない。

そんな状態で胸ばかりイジられたのだからお預けを前に式は苦しんでしまう。

一方であなたはこれから式の身体を堪能する前のオードブルである乳房の感触に股間をイキらせている。

勃起が加速し、玉袋の中で精液が作られて、昨夜もあれだけ射精したことなどもう忘れたと言わんばかり。

暴発するという式の心配も通じていないほどの隆起はジーンズ越しに擦り付けているだけで挿入しているかのような存在感である。

悶えて艶を出しながら、式はこの暴れん坊で身体の疼きを鎮めてほしいとあなたに目配せをした。

「ありがとう」

式がポツリと漏らす感謝の言葉。

鏡越しの目配せに気づいたあなたは式のジーンズをやや無理やりにおろして半脱ぎにさせると、自分のズボンも同様に半脱ぎにして後ろからおちんちんを突き出していた。

肉欲に身を任せているがその動きは焦らずじつくりである。

汗で蒸れつつも愛液で濡れた式の入り口に暴発寸前の肉棒をあてがったあなたはゆっくりと膣穴を掘った。

先端をキュツと締める入り口の狭さだけでも発射しそうな心地よさ。

それを我慢したあなたはニユルニユルと膣内を押し広げながら腰を突き出してあなたのかたちを式の身体に刻む。

初めて同士でもないし、なにより昨日の同じ頃合いにもあれだけ身体を重ねて求め合った後でもありながらハツモノのような感覚。

普段のこっそり隠れながらの行為とは異なる、普段と違うシチュエーションの妙もあるのだろうか。

根本まで差し込んだあなたがゆっくりと腰を引くと、式の膣壁はあなたから精液を搾り出すかのように吸い付いて尿道を刺激する。

掻き出すような刺激に思わずあなたは腰を突き出すと、噴水のような勢いで精液を注いでしまっていた。わずか一回半のピストン。

勿体ないという反射で振じ込んだ膣内射精は式のお腹に新たな熱を灯す。

（もう射精してしまうだなんて。でもまだイケるわよね？）

お腹の奥……子宮の入り口近くに搾り出された白濁液は昨夜注がれたモノと混じっていく。

射精のたびに収縮と膨張を繰り返すあなたのモノは依然として硬さを保ち、式が察しているとおり「まだイケる」と答えていた。

びゅっびゅっと効果音を伴う射精がおさまったあなたは一呼吸つけるかのように、改めて腰を突き出すと、おちんちんを根本まで差し込んで式の奥をかきまわす。

さながら注いだ精液がすべて子宮に届くように後押ししているような動きに式は陶醉して手の力が弱まっていた。

壁に手をつけることを出来ていなかったらそのまま床に倒れ込んでいたであろう。

スッキリ出来たし、このままずっと続けて欲しい。

だが思ったよりも気持ちよくて腰が抜けそうな式に対して、暴走するあなたは肉欲が止まらないようだ。

「ひゃあん♥」

腰砕けな式が悶えたのはあなたのせい。

下から支えるように腰を突き出したあなたで串刺し状態の式は淫靡な浮遊感に満たされた状態で果てていた。

ガクガクと震える式の腰をあなたは両手で支えつつ、持ち上げるようにピストンをして式を喜ばせる。あなたが止まらないから式はいつてもいつても止めどない。

自分から抱いてほしいと頼んだのにあなたに抱かせてほしいとねだられ続ければ恋人冥利に尽きるというやつか。

イカされっぱなしではあるが、だからこそあなたが喜んでいるという事実が最大の刺激的な要素。

そろそろあなたも次の爆発の準備なのか。

お腹の奥で鈴口が開いたのを式は微細に感じ取っていた。

（そろそろかしら）

このまま精液を注いで孕ませてほしい。

さきほどのものだけでなく昨日のもので既に孕んでいるのかもしれないが、どちらにしろあなたの子種で  
の子のように可愛い子供を産みたい。

そんなささやかな願いを思いながら、一足先に気落ちする式のお腹にあなたは精液を注ぎ込んだ。

断面図にすれば密着した膈壁を通る管から白いものがあふれ出して、入り口前の空間を満たしていく。

ただでさえタプタプになっている一番奥は新しい精液によって拡張し、ぽっこりと少し膨らんで子宮に入る  
ための準備をしていた。

このまま引き抜いたら溢れ出しそうな状況。

今の状況で注げる全てを搾り出そうとしたあなたは手を式の胸元にやると、胸を掌に包み込みながら三度目  
の大波を起こした。

(!!!)

あなたの中で蠢く快感の波をお腹からダイレクトに感じ取った式は一緒に果ててしまう。

先にイキっぱなしだったことなど忘我の彼方とでも言い切る勢いでタイミングを合わせた絶頂は、昼間のお  
預けで疼いていた身体の芯から心地よくなるのに充分だろう。

射精がおさまって勃起が緩むのに合わせて溢れ出すあなたの汗。

掌までびっしょりの体液は式にシャツに手形を作り、息を荒げたあなたがおちんちんを引き抜いて寄りかか  
ると、式の背中は瞬く間に汗を吸って水浸しになっていた。

「はあはあ」

息を切らせながらあなたは式に抱きついている。

そして壁に手をつけてあなたを支える式は剣が引き抜かれた穴から溢れる精液が太ももを伝わるのを感じながら余韻に浸る。

このまましばらく。

まったりとしていたあなたたちを起こしたのはホテルのコール。

驚いたあなたが移動して受話器を取ると、休憩時間終了間近を伝える機械音声が流れてきた。

「もうおしまいなのね」

コールの時点で意味を察していた式は残念そうな顔であなたを見る。

半脱ぎのジーンズにまで溢れた精液を伝わらせた汗塗れの式は艶めかしく、勃起を回復させるのに十分な淫猥さなのだが、時間切れでは仕方がない。

シャワーで汗を流し、精液にまみれていない服に着替えたあなたはホテルを後にする。

スッキリはしたがまたしたくなるという、どこか本末転倒な結界にヤキモキしながら家路についくあなたは自然と式の手を握って歩いていた。

まるで掌だけでもいいから式と繋がって、もっと子作りをしたいとも言わんばかりに。